

短 報

## 部首別漢字書字における語流暢性の検討

### Examination of word fluency in kanji writing classified by the radical

稲葉 敏樹

**要 約**：語流暢性に関する検討は、音声言語（発話）に関するものがほとんどで、文字言語（漢字）に関する検討は少ない。書字面における語流暢性に関し、漢字特有である部首に着目し、部首ごとの反応について、データを収集し、傾向を探り、失語症者、特に失名詞失語の語流暢性向上のための訓練や認知症予防のための知的賦活訓練としての可能性について検討した。対象は本学、言語聴覚学専攻学生55名。内訳は、男性16名、女性39名。平均年は、 $21.75 \pm 3.83$ 歳であった。漢字書字における語流暢性の評価では、各文字を正確に書かなければならない関係上、1分間の制限時間では部首ごとの反応数に差が出にくいと考えられ、制限時間の再検討が必要である。

**キーワード**：語流暢性、部首、漢字

#### 1. はじめに

語流暢性に関する検討は、音声言語（発話）に関するもの（稲葉ら、<sup>1,3)</sup> 1991,1993,1997）がほとんどで、文字言語（漢字）に関する検討は少ない。発話面における語流暢性では、一定の語頭音の単語について想起する文字流暢性課題と一定のカテゴリーに属する単語について想起する意味流暢性課題があるが、文字言語では、漢字の場合、一定の部首を含む漢字を想起する課題が考えられる。

#### 2. 目的

漢字書字の語流暢性について検討するうえで、漢字特有である部首に着目し、部首ごとの反応を分析し、失語症、特に失名詞失語の語流

暢性向上訓練、認知症予防のための知的賦活訓練としての可能性について考える。

#### 3. 対象

対象は本学、言語聴覚学専攻学生55名。内訳は、男性16名、女性39名。平均年は、 $21.75 \pm 3.83$ 歳であった。対象には事前に本研究の目的を口頭で説明し、同意を得たもののみを対象とした。

#### 4.1 方法

使用する部首については、音声提示した際、部首を想起しやすいもの、及び字を想起しやすい部首（例：さんずい→水に関するもの）という観点から①「さんずい」、②「かねへん」、③「くさかんむり」、④「ごんべん」、⑤「きへん」の5種を課題とした。

制限時間は各部首1分間とし、記録用紙に性別、

Toshiki Inaba  
大阪河崎リハビリテーション大学  
リハビリテーション学部 言語聴覚学専攻  
E-mail : inabat@kawasakigakuen.ac.jp

年齢を記入し、各部首ごとに口頭で部首名を伝えと同時に部首を板書にて示した。各部首1分間で出来るだけたくさんそれぞれの部首を含む漢字を書くように求めた。誤った場合は、斜線等で消す（消しゴムで消すなど時間を要する消し方は避ける）よう指示した。

漢和中辞典（旺文社）に掲載されている文字数は、表1に示すように、「さんずい」463、「かねへん」197、「くさかんむり」408、「ごんべん」113、「きへん」475と部首ごとに字数の差があるものの、1分間の書字に影響を与えるほど字数の少ない部首はないと考えた。

表1 各部首の文字数

| さんずい | かねへん | くさかんむり | ごんべん | きへん |
|------|------|--------|------|-----|
| 463  | 197  | 408    | 113  | 475 |

略字は正反応とした。

同じ文字を略字と略さないで書いた場合は1字とした。

漢字の書き取りテストなどであれば誤りとなる、はね、はらい等の誤りや1、2画程度の細かな誤りは正反応とした。

かねへんにおける「金」、ごんべんにおける「言」、きへんにおける「木」は各々、正反応とした。正しい字でも、被験者が斜線等で消したものは誤反応とした。

部首による画数の違い（3～8画）により反応数に差が出る可能性があるが、今回の結果から検討することとした。

## 4.2 倫理的配慮

本研究における倫理的配慮は、ヘルシンキ宣言及び厚生労働省による臨床研究に関する倫理指針に基づき、大阪河崎リハビリテーション大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号 OKRU-221107）。

## 5. 結果

各部首間に有意な差は見られなかった(表2)。

表2 各部首の反応数

| さんずい        | かねへん        | くさかんむり      | ごんべん        | きへん         |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 5.58 ± 2.30 | 4.60 ± 1.58 | 4.84 ± 1.61 | 4.76 ± 1.80 | 5.18 ± 2.11 |

各部首の画数の違いは反応数に影響を与えなかった。(例：湖（12画）、針（10画）のように、偏の画数が多くても傍の画数が少ない漢字は多い。)

男女差については、今回対象数に差があるため、検討しなかった。

## 6. まとめ

①漢字書字における語流暢性の評価では、各文字を正確に書かなければならない関係上、1分間の制限時間では部首ごとの反応数に差が出にくいと考えられる。一方で制限時間の延長により、語流暢性による差よりも漢字に関する教育レベルの差となる可能性もある。それらを考慮しつつ制限時間の再検討が必要である。

②課題部首について、想起しやすいと思われる部首としたが、今後は、教育漢字を参考に学年別配当表に基づき、部首別の上位部首を用いるなど、教育面にも配慮を加えた課題部首についてのさらなる検討も必要であると考え。発話における語流暢性においても、カテゴリー、語頭音によって難易度は異なる。制限時間、使用部首の再検討し、漢字書字における語流暢性の向上に適した部首、制限時間について検討したい。

本論文の要旨は、第36回日本高次脳機能障害学会学術総会で報告した。

[文献]

- 1) 稲葉敏樹、吉原博、渡辺佳弘、田中このみ、前田守：  
失語・非失語におけるカテゴリー別語列挙の比較。中伊豆リハビリテーションセンター研究紀要 1991, pp45-47.
- 2) 稲葉敏樹、吉原博、前田守、窪田俊夫、長畑則子：  
失語・非失語におけるカテゴリー別語列挙の比較(第2報)。中伊豆リハビリテーションセンター研究紀要 1993, pp47-50.
- 3) 稲葉敏樹、吉原博、窪田俊夫、長畑則子、川畑英理子：  
失語・非失語におけるカテゴリー別語列挙の比較(第3報)。中伊豆リハビリテーションセンター研究紀要 1997, pp23-25.
- 4) 漢和中辞典、旺文社、東京、1990.